

## 9月27日 年間第26主日 マタイ21章28～32節 「神の国ぶどう園」に招く神

今週は父親と兄弟のたとえ話です。21章でイエスはエルサレムに入城されているので、神殿において祭司長や長老たちとの論争の中で語られた教えということです。場所と時は離れていますが、先週に続いてたとえ話の舞台はぶどう園となっています。

ぶどう園のオーナーである父親は、二人の息子にぶどう園に行って働くように頼みます。兄は「いやです」と拒否し、弟は「はい、承知しました」と快諾します。けれども、兄は後で考え直してぶどう園の作業に行き、弟は結局行きませんでした。わたしは長男なので、物語に兄弟が出てくると、ついつい兄の立場で考えてしまいます。兄弟が出てくる話という放蕩息子のたとえ話が有名ですが、最初は弟が悪者だったのに回心し、最後は兄が悪者になるので残念でした。当時のユダヤ社会では家父長制だったので、跡取りの兄は恵まれているのに対して、弟は家を出て働く立場でしたから、弱い立場の弟が物語では主人公になることが多いようです。判官びいきというものもあるかもしれません。

このたとえ話は、兄は徴税人や娼婦、弟は祭司長や長老たちを表しているのです。立場から言うと逆のイメージがあります（放蕩息子がそうであったように）。ここではイエスは兄弟の社会的立場にはこだわらなかったようです。それともわたしのような兄の立場の信者（あるいは読者）に配慮してくれたのかな？

ところで祭司長や長老たちの指導者階級の人たちはなぜ弟にたとえられるのでしょうか。彼らはたしかに律法を守り、神殿で礼拝し、人々を指導していました。それは父に対していい返事をした弟の態度と共通します。しかし、彼らは洗礼者ヨハネを受け入れませんでした。なぜならヨハネは神殿で自分たちの利益や権力を守ろうとしている彼らをきびしく非難し、神殿のあるエルサレムを見捨て、荒れ野で悔い改めを伝えていたからです。神から遣わされた預言者であるヨハネの悔い改めを受け入れなかったことが、父の願いを實踐しなかった弟の態度を表しているということです。

それに対し、彼らが罪びととして見下していた徴税人や娼婦は、兄のように最初は神の思いに逆らって罪を犯してしまいましたが、ヨハネの勧めを受け入れて悔い改めました。それが兄の態度と共通しています。さらに、指導者階級の人たちはそれを見て悔い改めることもできたはずなのに、残念ながら偏見やプライドが邪魔をして考え直す機会を失ってしまったのです。

このたとえ話は「言葉より態度」「不言実行」といった道徳的な教えにとどまるものではありません。神とわたしたちの根本的な関係を表していると言えます。先週の福音と合わせて考えると、神は何度も「ぶどう園に行きなさい」と呼びかけ、考え直す機会を与えてくださいます。なぜなら、神はとても気前の良い方だからです。わたしたちもそのような神の「気前の良さ」に信頼して「神の国ぶどう園」に行きましょう。（柳本神父）